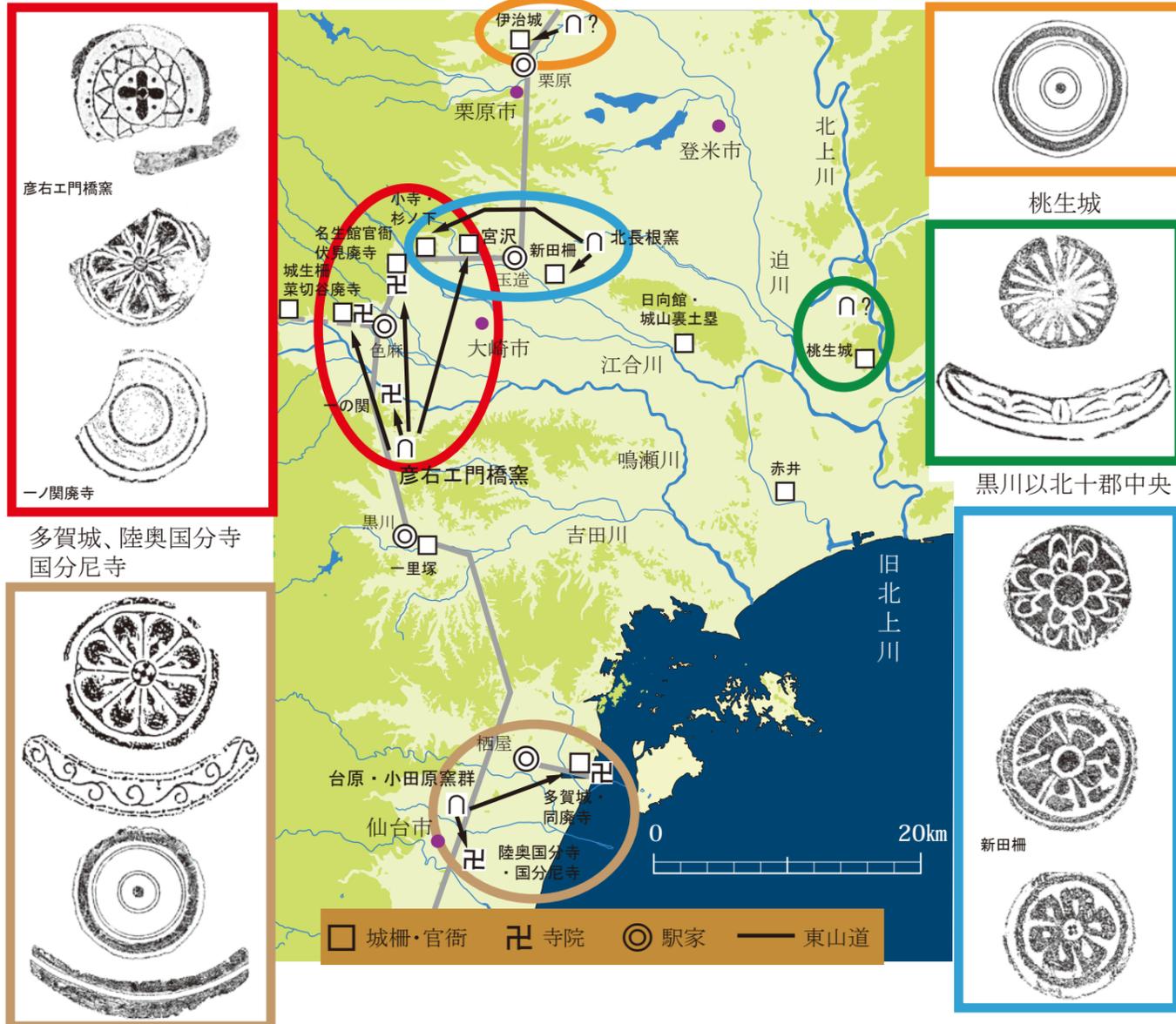


# 彦右工門橋窯跡

～古代生産遺跡の発掘調査成果～



第7図 陸奥北部における8世紀後半の瓦供給関係

## まとめ

- ①彦右工門橋窯は8世紀後葉～9世紀初頭に須恵器や瓦を焼いた窯のほか、土師器焼成坑・鍛冶炉などといった生産に関わる様々な施設が存在したことが分かりました。こうした須恵器を中心とする生産地の施設構成が具体的に判明したのは大きな成果といえます。
- ②本遺跡は古代の役所や寺院特有の製品が出土したこと、瓦の供給先が県北3寺院や大崎市西側から色麻町にかけての城柵・官衙であることから、当時、黒川以北十郡と呼ばれた地域西側の城柵・官衙・寺院を中心に製品を供給した公的性格が強い窯であったと考えられます。
- ③陸奥北部における8世紀前半の瓦生産は、各諸窯から多賀城・多賀城廃寺と黒川以北十郡の城柵・官衙・寺院に対し、共通する文様を有した瓦が供給されました。これに対し、8世紀後半になると各諸窯の供給範囲は多賀城・陸奥国分寺・国分尼寺周辺、黒川以北十郡西側、同中央、桃生城、伊治城といった狭い範囲への供給が変わります(第7図)。軒瓦もまた、一部に共通要素があるものの、それぞれで特有の文様が採用されています。今回の彦右工門橋窯跡の発掘調査は、こうした窯業生産が大きく変化した様子を明らかにできたといえます。

## 1. 調査要項

所在地：大衡村大衡萱刈場・駒場彦右工門橋・吹付  
 調査原因：国道4号線拡幅工事  
 調査期間：2019年8月1日～11月8日  
 (確認調査含めて12月下旬頃終了予定)  
 調査面積：対象面積約3400㎡ 発掘面積約2500㎡  
 調査主体：宮城県教育委員会  
 調査協力：大衡村教育委員会  
 調査担当：佐藤渉、村田晃一



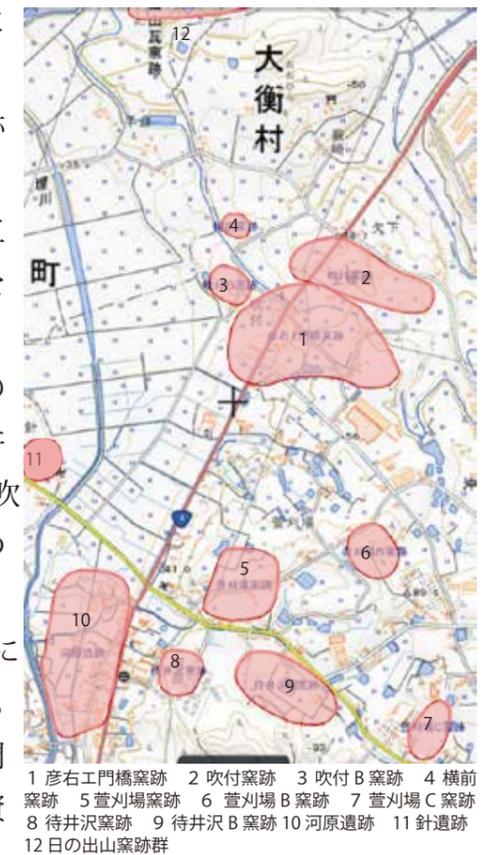
第1図 彦右工門橋窯跡の立地と既往の調査

## 2. 彦右工門橋窯跡の立地と大衡窯跡群

彦右工門橋窯跡は大衡村駒場彦右工門橋・萱刈場・吹付ほかに所在する奈良～平安時代を中心とした遺跡です(第1図)。以前から須恵器や瓦などの遺物が出土しており、丘陵の南斜面に窯跡が知られていました。

今回、遺跡内に国道4号線拡幅工事が計画されたことから、工事に先立ち、発掘調査を実施することとなり、今年度から調査を開始しました。

大衡村の北側、大衡村役場から北に約3kmの大松沢丘陵西縁の緩斜面に立地するこの地域では、彦右工門橋窯跡のほかにも待井沢窯跡A・B地点、萱刈場窯跡A・B・C地点、彦右工門橋窯跡、吹付B窯跡、吹付窯跡、横前窯跡の9地点で古代の窯跡が複数みつかり、それらは総じて大衡窯跡群と呼ばれています(第2図)。窯跡の年代は8世紀中頃から9世紀後半で、須恵器を中心に生産していました。彦右工門橋、吹付B、吹付の3地点では瓦もみつかりましたが、これまで、萱刈場窯跡A地点と彦右工門橋窯跡でそれぞれ3ヶ所ずつ小規模な調査が実施されたのみで資料に乏しく、窯以外にどのような施設があったのか、生産された製品はどのようなものであったのかなど、詳細はよくわかりませんでした。



第2図 大衡窯跡群



図3 調査区平面図

### 3. 発見した遺構と遺物

今回の調査では、須恵器や瓦を焼いた窯跡は見つかりませんでした。奈良時代後半から平安時代（約1200年前）の土師器焼成遺構6基、鍛冶関係の土坑2基、木炭焼成遺構3基といった生産関連の遺構、瓦や大量の須恵器など窯でつくられた遺物を発見しました。以下、遺跡を特徴付ける遺構・遺物を以下で紹介します。

#### 発見した遺構

##### 【土師器焼成遺構】

土師器（古墳時代から平安時代につくられた素焼きの土器）を焼いた穴を調査区西側で6基発見しました。平面形は楕円形で、大きなものは長軸2.8mほどありました。深さは最大で約50cmほど残っていました。底面や壁が赤く焼けており、硬く焼き締まっている部分もあります。

遺構の中には灰や炭、焼けた土などと一緒に土師器の破片が残されていました。それらは細かい破片になったものと、器面が剥離したものがあり、熱を受け過ぎるなどして焼成に失敗した製品が残されたとみられます。ここに残されなかった完成した製品は、近隣の官衙、寺院、集落などで使われたことでしょう。

##### 【鍛冶関係の土坑】

鉄滓が大量に出土した穴を2基発見しました。平面形は、長軸約0.7mの楕円形で、深さは10cmほど残っていました。鉄滓は、鍛冶をした際に出た鉄くずです。鍛冶炉は見つかりませんが、ふいごの羽口が見つかり、これらの土坑の存在と合わせて、近くで鍛冶が行われていたとみられます。

##### 【木炭焼成遺構】

木炭をつくった穴を3基発見しました。平面形は長軸1m以下の隅の丸い長方形で深さは20cmほど残っていました。鍛冶に用いる木炭をつくっていたとみられます。

#### 出土遺物

##### 【珠文縁素弁蓮華文軒丸瓦と無文軒平瓦】

出土した瓦は多くはありませんが、丸瓦、平瓦、軒瓦、熨斗瓦、鬼瓦があります。珠文縁素弁蓮華文軒丸瓦と無文軒平瓦は、これまで大崎市西部の国史跡名生館官衙遺跡やその附属寺院の伏見廃寺、色麻町の一ノ関廃寺などで見つかりました。今回の調査によって、その生産地が当遺跡であることと、瓦のセット関係が明らかになりました。

##### 【大量の須恵器】

調査区内で見つかりしている沢を埋めた土や土師器焼成遺構を埋め戻した土を中心に大量に出土しています。出土した須恵器は、坏、瓶、甕などのほかに高坏、盤、硯（円面硯と風字硯）、双耳坏、といった官衙特有の製品と水瓶など寺院で用いられる製品もみられることから、公的な性格の強い窯であることがわかりました。



第4図 土師器焼成遺構



第5図 木炭焼成遺構



〈瓦当〉  
珠文縁素弁蓮華文軒丸瓦



〈瓦当〉



※縮尺 1/3 無文軒平瓦 〈顎面〉

第6図 彦右工門橋窯跡出土瓦